



ひまわり通信

No.00712. 2025.4.10(木)

健康寿命から貢献寿命へ

もと

「血液健康法」～病気の因を断つ～

●薬は毒である

薬についての学課である薬理学の教科書をあけると開口一番に「薬は毒である」と書かれている。ある病気に用いられる薬は、その病気の症状を抑える主作用と同時に、必ずといっていいくらい副作用をもっていることを知らなければならない。スモン病、サリドマイド児、ペニシリン・ショック、風邪薬アンプルによるショック死、ストマイや、カナマイ等の副作用で耳が聞こえなくなったりなど恐ろしいものからはじまり、世の中には薬の数だけ副作用がはびこっている。

だが、開業医や大学病院へ行くと、相変わらずたくさんの薬の袋を手にした人をよくみかける。この病院ははやっている病院にことに強く、両手にどっさり薬の袋をかかえ、まるで昔の富山の薬売りみたいになっている人さえいるくらいである。

医師がひとつの病気におどろくほどたくさんの薬を与えるのには、いくつかの理由が考えられる。

まずは無責任な大量投薬。これは胃病などのときに一番多いケースである。胃病といっても消化不良のときもあれば、胃酸過多のことも、消化性潰瘍のこともあるので、消化剤や消化酵素、中和剤、消炎酵素剤、鎮痛剤、精神安定剤などを一緒にたにして与える。考えられるあらゆるケースに備えて薬を調合しておけば、下手な鉄砲も数打ちゃあたるというように、どれかひとつくらいは効くはずだと考えての処方である。

次に考えられるのは、重複投与によって効果を強めるのをねらったの処方で、リウマチなどによくみられる。副腎ホルモン、鎮痛剤・抗炎症剤、ビタミン剤などをまとめて与えるやり方だが一つの病状に4つの薬を使ったからといって、一種類の4倍効くかということ、そう単純計算ではことはすまない。効果は4倍にはならないが、副作用が4倍になったというケースの方が多いためである。薬九層倍とは昔からの地口だが、九種類の薬を使えば九層倍の副作用ということになるわけである。

三つ目に考えられるのは、保険の点数目当ての処方である。構えの立派な大きな病院では特にこのケースが多い。カゼといったら、昔のアメリカ海軍の軍医のように何でもかんでもアスピリンで済ませていれば、たいていは治ってしまうはずだが、それでは一日分で90銭つまり一円にもならない。したがって、そんな安い治療費では商売にならず病院は破産する。そこで、大量の薬を与える。すると何千円かになる。カゼや胃腸病という、一番患者数の多い病気にこのやり方をしていれば、病院は雪だるま式にもうかる計算である。

つまり、ひとつの病気にどっさりと薬を与えるやり方は、病気を治す、という医師の使命からするならば、ひどく無責任な行為だといえる。

昭和53年11月22日 初版発行 著者 聖医 岡田一好

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198